

# 御 城 下 札 ノ 辻 考

—地域類型との関連において—

矢 守 一 彦

## I. はじめに

### II. 原初形態

- (1) タテ町口型
- (2) ヨコ町口型

### III. 大手前志向

- (1) 十字ノ辻型
- (2) T字ノ辻型
- (3) L字ノ辻型
- (4) クライマックス型(極相型)

### IV. 札ノ辻の賑わい

- (1) 繁昌中心
- (2) シビックセンター型

### V. 札ノ辻のトポス

- (1) 転位事例の検証
- (2) 祭礼の御旅所

### VI. おわりに

## I. はじめに

高札は〈上意下達〉の装置であったから、高札場は〈上意〉の発源地たる城の大手門前、そして〈下達〉さるべき民衆の目にふれやすい位置、つまり往来人の多い町通り、ことに通り町(城下に繰り込まれた主要街道)上を選ぶことが一般的であった。本稿では、諸城下における高札場の立地パターンを整理し、その意味を考えてみたい。

そのために、幾十の城下絵図を対比しつつ、各城下町プランの中に高札場を定位するに当たり、上記の大手門(名称の如何にかかわらず、城と町との接点としての実質の大手門)と通り

町、そのほか橋などの最小限の構成要素を記号化した簡略な図式を考案してみた。〈記号論〉とも〈構造主義〉ともよばないが、城下町景観の基底にひそむ構造を端的に表わした〈構造式〉といえるかも知れない。

ところで、西南日本・東北日本というような地域類型は、第一次産業や生活様式などについては比較的设置しやすいであろうが、都市、とくに都市プランには現われにくいとされる。しかし一方、幕藩制下の地域類型は、藩類型として現出したのだという発想に立てば<sup>1)</sup>、城下町プランもその成立期・改造期の当該藩体制の差異の反映として整理することができる。戦国期型→総郭型→内町外町型→町屋郭外型という変容系列、また大手と街区配列つまり町通りの方向から捉えたタテ町型→ヨコ町型などの統一的な分析尺度を当てることにより、各城下町プランを典型的に定位できるはずである。しかもそれは、畿内、関東、非領国地帯、東北など後進地域ごとに、藩政史の差をうつつて地域的な類型に分けられるのであるが、いずれも先の拙著<sup>2)</sup>で地方別に詳述したところなので、ここでは札ノ辻の立地に関してのみ、ふれるにとどめたい。なお、町屋郭外型、タテ町型などについても、何度も述べてきたので、同じく前著参照ということにさせていただきたい。

## II. 原初形態

### (1) タテ町口型

高札場は後述のように、ある時期から大手前立地がかなり普遍化するけれども、当初はそう

ではなかったのではあるまいか。タテ町型で、ことに大手前ターミナル式に街道を導入したケースでは、大手前は必ずしも人通りの多い場所ではなかったからである。

たとえば戦国期型の城下町である大和の〔高取〕では、天守閣をはじめ城の主要部と家老屋敷の残る下子島地区との標高差は約450mあり、城下はそれよりさらに下った土佐の町である。この縄張りは大和豊臣氏により文禄頃に成ったとされる<sup>9)</sup>。寛永17(1640)年入部の植村氏はそのまま戦国的城郭をうけつぐが、藩主の居館や下屋敷(政庁)は別所郭、ついで上記の下子島に移し(寛永末～正保初頃)、次第に大部分の侍屋敷もその周辺、「札之辻から上」の部分にまで下ってきた。

侍屋敷地区とその先にタテ町型に続く土佐町との間には、釘貫門が設けられた。これはいわば実質上の大手門であるから、高取はタテ町型にして大手門前に高札場を置くタイプということになる。しかし、釘貫門が設けられる以前、つまり別所郭の黒門が実質上の大手門(正規に「大手門」を称するのは、はるかに山上の三ノ丸と二ノ丸の間にある)であった頃から、高札場は土佐町の入口に設けられていたであろう。札ノ辻から黒門までは1,500mの山道、町民にこれを登って高札を見に来いということはなかったであろう。なお「辻」というのは、この地点から清水谷への道を派出しているからで、釘貫門設置後は、後述の福島、亀山などと同じL字状の類型に変わったということになる。

〔萩〕慶長9(1604)年の建設で、指月山の頂に麓の本丸とは別に詰ノ城を設け、松本川・橋本川で総郭型をとるなど、古い要素を保持している。実質上の大手門は三ノ丸の中ノ総門で、呉服町から東田町へ東西にのびる町通り、その東端で南に折れて唐樋町、御許町と橋本大橋へのびる「御成道<sup>9)</sup>」(藩主の通路)を主軸としてタテ町型の町割りを採用。高札場は中ノ総門前ではなく、上記の屈曲点である新堀川の橋の北詰に設定されていた。いわば内町の町口、内町と外町の境界点である。

淡路の〔洲本〕は、脇坂氏(3万石)の時期にどれほどの城下が形成されていたかは明らかでないが、後世のプランに整えられるのは、元和元(1615)年、蜂須賀氏の領有に帰し、ことに「由良引き」以降に属するものとされる<sup>9)</sup>。このように設営時期は比較的遅いにもかかわらず、海と山、洲本川(塩屋川)と物部川に囲まれた総郭型をとっているのは、地形的条件に主要因があるのだろうが、城代家老稲垣氏の陣屋から発する御門筋町・水筒町(ともに侍屋敷地区)に続く馬場町・上水筒町、西に折れて、その名も通町というメインストリートも、タテ町型をなしている。

通町は四丁目で堀に架せられた橋を渡り五丁目以降に続くが、この南北に走る10～14間の堀筋を境に、「洲本府は(略)東を内町といひ、西を外町といふ」(「淡路常盤草」)。そして橋の東詰が「札ノ辻」である。総郭型であるとともに内町外町型プランでもあるわけだが、当初、外町は洲本川の後背湿地で、この地域の開発は寛永年中からさらに元禄期と、かなり遅れたようである。高札場は内町・外町の境界に立地しているが、かつてはそこは町の入口でもあっただろう。

なお、タテ町型といえば大坂が典型的だが、高札場はメインルート高麗橋通り橋の西詰にあった。他にも公儀橋たる難波橋の南詰、日本橋の北詰、大川の五十石船のターミナル八軒屋等々に置かれたが、里程の元標は高麗橋詰であった。その他、人吉、岩槻などもこの類型に属しよう。

〔鳥取〕池田長吉時代も、元和3(1617)年入部の池田光政による改造後も基本的には総郭型であり、ともにヨコ町型に横にブロックを並べていた<sup>9)</sup>。しかし長吉時代の総郭たる惣門ラインの智頭口・若桜口・鹿野口の3惣門より南下する各通り町は、タテ町型に屋敷割りされていた。このうち智頭惣門が実質上の大手門であり、大手町通りたる智頭町筋が付け替え後の袋川(光政以降の総郭)を渡って智頭往来となる地点、その橋の北詰が「札場」であった。

## (2) ヨコ町口型

鳥取とは逆に天正13(1585)年、豊臣秀次のつくった〔近江八幡〕は、タテ町型の代表とも見られるが、それにクロスするように導き入れた京街道と南縁の道だけはヨコ町型をなしている。高札場は実質上の大手橋(「大手橋」は西の舟木にある)である本町橋の前にはなく、京街道が城下の東南端の「鍵ノ手町」において鍵ノ手に折れ、「三町縄手元町」となる屈曲点で「札ノ辻」とされた<sup>7)</sup>。

つぎに、純然たるヨコ町型で同様に町口に札場をおく事例をあげておこう。

〔松阪〕天正16(1588)年、蒲生氏郷によって建設され、元和5(1619)年以降紀州領となり城代がおかれるが、プランに大きな変化はない。城地と侍屋敷地区の東南～東北部を回って走る和歌山街道・参宮街道を主軸に形成されたヨコ町型城下である。これに大手町が直交する本町の四つ辻あたりが松阪商業の中心地であるが<sup>8)</sup>、高札場はここを過ぎ坂内川の大橋の南詰におかれた。

〔唐津〕慶長7(1602)年、寺沢氏により建設され、その後も譜代大名が続く。三ノ丸の大手門に橋で連絡する。いわば第4郭<sup>9)</sup>に町屋地区を容れた見事な内町外町型だが、内町・外町ともにヨコ町型をとる。そして両者の境たる「札ノ辻橋」の西詰が札ノ辻であった。

〔岡山〕天正元(1573)年、宇喜多直家の建設に始まるが、旭川の河道の付け替え、本丸新築などは次の秀家の代、さらに外濠構築は慶長6(1601)年入部の小早川氏による。寛永9(1632)年以降、池田光政によってさらに拡張・整備されるが、基本プランは小早川氏までに成ったといえよう。秀家による大手門付け替えの前後とも、ヨコ町型の町並みで、高札場は川崎町の手門をやや離れた橋本町、旭川に架かる京橋の西詰<sup>10)</sup>におかれた。外濠と旭川との間が郭内であり、この範囲に収容された町屋がいわば内町であるから、岡山においても、高札場は内町・外町の境界をなす水系の橋元が選ばれていることになる。

〔津〕前史はともかく、慶長16(1611)年、藤堂高虎が近世城下に大改造する。彼の代に成った市域は、塔世川・岩田川および「惣構え」で囲われて、ほぼ総郭型だったといえる。第2代高次の代に参宮街道に沿って「橋南」地区へも発展し、内町外町型となるが、ヨコ町型である点に変化はない<sup>11)</sup>。そして高札場はここでもかつての町口、内町・外町の境界である岩田橋の北詰に設置された。

〔桑名〕港町・宿場町などとしての前史をもつが、慶長6(1601)年、本多忠勝によって、これらの諸都市機能を兼ねた城下町に改造される<sup>12)</sup>。城地の西辺に平行して、「七里ノ渡」の着船場川口町から南下する東海道に直に北大手門・南大手門が開くことから、後述のクライマックス型と同じ大手前横断型であるが、高札場は大手門前ではなく川口御番所の側におかれた。

〔大垣〕慶長以前に出来た「古来町」と、その後の「新出来町」に分けられる。前者は概ね慶長18(1613)年に石川忠総がつくった総堀内にあり、内町外町型といえ、またいずれもヨコ町型に配列する。美濃路に沿って通り町がつけられ(「往還町」という<sup>13)</sup>。他は「脇町」)、総堀外の伝馬町(これも古来町)より名古屋口惣門を経て総堀内に入れられ、本町・竹島町・俵町となり、京口惣門より出た。高札場は本町のうち、本陣もある大手門付近ではなく、寛永13(1636)年以來、同町北西隅の屈折点に立地する。この位置は総堀の名古屋口惣門にも近いのでヨコ町口型、内町・外町を限る水系の橋詰立地型の垂型ともいえるだろう。

〔掛川〕前史はさておき、文禄年間の山内一豊の城地・城下の改造で後代のプランが決められた。逆川で土・町をわけた町屋郭外型だが、その町屋地区も文禄の惣構えのうちに入れられた<sup>14)</sup>。その後、東へ新町、西へ西町の一部・下俣町などが街道沿いにのび、総郭型→内町外町型と変化してゆく。町並みは東海道の通り町を軸にヨコ町型を呈するが、大手門前には連着町が横断し、大手筋らしきものは著しく退化している。高札場はこの大手門前ではなく、二藤町

を東へ進み南に屈折する点に立地、通り町は次いで東に折れて木町となり、惣構えの土手、堀を越えて新町に続く。大垣と同様、内町・外町境に近い通り町の屈曲部という点で、ヨコ町口型の亜型といえるだろう。

以上にみたように、高札場にはタテ町型においてはほとんどの場合、通り町の終着たる大手前ではなくて、城下城ないしは内町外町を画定する水系に架かる橋、また街道の城下への入口などが選定されている。ヨコ町型でも比較的形成の古いものにこのタイプのものが多い。

一方、この仮説に反する事例も見出されるが、それについてはつぎのように考えることができる。たとえば熊本（慶長6年、加藤清正建設）は、西の大手口である新一丁目門に対する新町、北の新堀門に対する京町ともにタテ町型であるが、新一丁目門の門前が「札ノ辻」であり、「四大海道」の里程の元標もまたここにあった。熊本の場合はこの位置はタテ町たる新町の終着点ではなく、漆畑あるいは法華坂を経て<sup>15)</sup>、上記の新堀門から北にのびる京町に通じていたのである。

### Ⅲ. 大手前志向

#### (1) 十字ノ辻型

タテとヨコのメインストリートがクロスし、その辻を「札ノ辻」とするケースがある。

〔名古屋〕 慶長14（1609）年に建設された名古屋は碁盤型町割りに江戸型屋敷割りを採るが、短冊型＋京型の近江八幡と同じく、タテ町型であり、またこれに街道をヨコに通している点でも共通している。しかし札ノ辻は、近江八幡が街道入口を選んでいたのに対し、本町門（実質上の大手門）より南下する本町通りと、北から3筋目を東西に走る伝馬町筋の交点が選ばれた。

〔仙台〕 慶長6（1601）年の建設以後、いくつかの時期にわたり拡大した多核的城下であるが、慶長創設期のプランは、広瀬川の大橋（実質上の大手橋）より東にのびる大町がタテの大手町通りであり、塩釜街道へと続く。これと奥州街道の通り町である国分町・南町のクロスす

る芭蕉ヶ辻が札ノ辻であった。

〔川越〕 プランは都市形成史を反映して複雑だが、松平氏（寛永16年入部）の整備後の大手通りである本町・高沢町はタテ町型の屋敷割りであり、これに中山道の通り町である北町・南町が交わるところが札ノ辻であった。

規模の小さい陣屋町クラスにもこのタイプは見出せる。たとえば園部（元和7年建設、小出氏）は、大手門より続く釘貫門から北上する宮町はタテ町型、これに山陰道の通り町である本町が直交する位置が札ノ辻であり、また三田（寛永10年建設、九鬼氏）なども同類の事例に属する<sup>16)</sup>。

#### (2) T字ノ辻型

城地の前面に整然とヨコ町型ブロックを配列しながら、大手町通り他のタテ町をこれにクロスさせる点は前出の鳥取と同じであるが、ヨコのうちメインの通り町は大手前を横断し、大手町通りとでT字形を形づくる。しかもその大手門前の交点に高札場が設定されている点で、鳥取をふくむタテ町口型・ヨコ町口型あるいは十字ノ辻型とも異なるグループをつくる。ほとんどの場合、町屋郭外型である点も注目に値する。

〔高松〕 生駒氏により天正16（1588）年に建設された城下であるが、いち早く実質上の大手橋（常盤橋）に丸亀街道を横づけして兵庫町・片原町などとし、一方、そこより金毘羅街道につながる通り町を南下させている。常盤橋南詰が高札場である。

〔会津若松〕 早く文禄元（1592）年、蒲生氏の改造では、郭内の侍屋敷地区と同様、郭外の町屋地区もヨコ町型にヨコのブロックから形成されているが、三日町・六日町・馬場町・大町など郭内諸口より北上する道はみなタテ町型に屋敷割りされた。うち米沢街道へ続く通り町である大町と、白河街道～越後街道をつなぐ下一之町・七日町などの通りとの交点が「札ノ辻」で、火見櫓もここに置かれた。

〔姫路〕 慶長5（1600）年入部の池田輝政の大改造後、中曲輪のうちには侍屋敷だけを入れる

町屋郭外型だが、外曲輪により内町外町型ともいえる。外曲輪に導入した西国街道は綿町・本町・坂元町と大手門（中之門）前に横づけされ、これに平行してヨコ町型の町並みが形成された。高札場は「本町中ノ門筋西側南角に在り<sup>17)</sup>」、しかも東西の通り町ないし町通りにクロスする南北の筋は、中之門筋の一本西の「堅町」（固有名詞）だけが、タテ町型に屋敷割りされ、その他は脇町であったから、正確にはT字ノ辻立地ともいえないが、その一種としておきたい。なお、寛永年間以降、本町から中之門筋あるいは堅町通りを南下し、坂元町よりは一本南の西二階町・俵町・福中町が通り町になったとされる。とすれば、L字ノ辻型ということになる。いずれにせよ、この通り町は、国産会所・本陣・脇本陣・間屋、豪商や旅籠の集まる城下随一の盛り場であった。

〔伊賀上野〕 慶長13（1608）年、藤堂氏によって建設された伊賀上野も一見このタイプであるが、ヨコの要素が強く、大手前を横切る本町・西町の通りが、奈良と伊勢を結ぶ通り町、これに東ノ大手・西ノ大手および札ノ辻から東立町・西立町および中立町が南下する。札ノ辻が大手門前ではなく、その中央の中立町と本町通りとの交点におかれた点、上記のタイプの亜型と見なすべきか。

〔厩橋〕 近世城下として整えられるのは酒井氏（慶長6年入部）以降であるが、早くも町屋郭外型を採る。大手門に続く城門から本町を発し、かつT字形に連雀町が横断する。

〔岩国〕 慶長8（1603）年、吉川氏によって建設された。主要な侍屋敷地区である横山と町屋地区である錦見とを結ぶ錦帯橋が実質上の大手橋で（これに続くのは侍屋敷の並ぶ大明小路）、一筋くい違いはあるが、玖珂町・柳井町・米屋町・塩屋町の本町通りが大手町通りに当たり、錦川の堤を背に上・中・下の土手町が湾曲しつつ並ぶ。高札場はこの本町頭<sup>かしら</sup>が土手町とT字状に出会う位置に設けられ、火見櫓も置かれた。

〔鶴岡〕 天正19（1591）年の建設だが、元和

8（1622）年入部の酒井氏による改造後は町屋郭外型を採る。五日町・三日町・十日町などが羽越街道に続く「通丁<sup>19)</sup>」であるが、このあたりのブロックは江戸型屋敷割りともみられ、三日町にはタテの大手町通りもみられる。「札場」はタテとヨコの交点というより、三日町橋（実質上の大手橋）の前に設けられた。

〔駿府〕 慶長13（1608）年の徳川家康のプランは江戸型に似た「駿府型」屋敷割りで、タテ・ヨコ「共に町通り<sup>20)</sup>」になり得るが、東海道の通り町と城地に近接する呉服町・両替町の2つがメインの町通りといえよう。七間町一札ノ辻町は通り町であり、かつ大手町通りである。それが直角に折れて呉服町四丁目になる地点が、実質上の大手門であり、札ノ辻であった。

〔浜松〕 天正18（1590）年の堀尾氏入部以来、多くの譜代の小大名が交代し、一貫した都市計画は遂行できなかったようだが、東海道を板屋町・田町・神明町と大手門前までひき、そこから直角におれて連雀町・伝馬町・旅籠町と南下させている。神明町の通りは大手門前を過ぎて紺屋町へと連続しているので、T字状のタイプともいえるが、通り町に着目すれば次のL字ノ辻の一バージョンとみるべきだろう。

### (3) L字ノ辻型

〔松山〕 慶長7（1602）年、加藤氏が建設、つづく蒲生氏、松平氏も15～20万石の大大名である。「堀之内」は侍屋敷のみで町屋郭外型を採り、実質上の大手門はこの「堀の内」である三ノ丸の北西の「北御門」よりさらに西の、本町一丁目角の「札ノ辻」と目しうる。本町に平行し魚町・松崎町などがヨコ町型に並ぶ。大手町通りにあたる紙屋町がタテ町型の屋敷割りをもってこれを貫く。本町一丁目の南に続く堀端町はその名の通り片側町にすぎないので、メインストリートだけをとればL字形とも解され、そのLの屈曲点を札ノ辻とするタイプとなる。

〔亀山〕 慶長14（1609）年入部の岡部氏によって三ノ丸が拡大され、「惣町裏郭堀」の形成で総郭型となる。ただし外濠の内は侍屋敷地区

だけを容れる町屋郭外型の要素も備えている。その外濠に沿って山陰街道（丹波道）が導き入れられ、通り町の一部である本町は大手門の前で屈折して新町・古世町へと続く。L字状の屈曲部、つまり大手門前が高札場である。

〔福島〕 城下町としての歴史は長いが、元禄13（1700）年入部の堀田氏、つづく板倉氏になって、その後のプランが形成される。町屋郭外型の外郭に沿って奥州街道が走り、本陣のある本町で直角に折れて上町以下に連なる。この屈曲点が札ノ辻であり、南に行けば「追手門」で、実質上の大手門前に当たる<sup>21)</sup>。そのほか、筑後の柳川など、このタイプに入る城下は少なくない。

〔上田〕 天正11（1583）年、真田昌幸の築城に始まり、寛永3（1626）年の仙石氏の改修によりほぼ出来あがる。街道を導き入れた海野町・原町の屈折点に大手門というL字形式で、前者はタテ町型、後者はヨコ町型といえよう。それぞれ海野郷・原之郷より招致された町で、城下および藩域経済圏の中心をなした。高札場は大手門よりやや下った海野町の本陣兼問屋、柳沢太郎兵衛家の門の向かって左側に建てられた<sup>22)</sup>。L字ノ辻の一種とみてよいだろう。

#### (4) クライマックス型(極相型)

上記は大手門前を横切る通り町と、大手町通り（多くは通り町でもある）とがT字形またはL字形をなし、交叉の地点、つまり大手門前を札ノ辻とするケースであった。そのうち、タテ町型の要素、つまり大手町通りが消滅し、完全なヨコ町だけとなってそこに大手門が直接開き、その前に高札場を設けるとい一群の城下町がある。

〔吉田〕 天正19（1591）年という早い時期に、池田輝政の改造で町屋郭外型、完全なヨコ町型、そして大手町通り消滅という段階を現出させた。すなわち大手門から通り町である呉服町・札木町間は31間あるが、その東側には御馳走屋敷、西側には腰掛・馬立、そして、札木町の名の通り、高札場が並ぶ（これらの施設は正保年間）。

この間がいわば大手道で、これは通り町とクロスして南にのびているが、その利町は道幅2間の「裏町」にすぎない。

〔篠山〕 慶長14（1609）年、天下普請でつくられた松平康重の篠山も典型的な町屋郭外型でヨコ町型を採る。しかも篠山街道を引き入れた通り町が大手門前を横切る地点において、大手道はもはや通り町を越えて先へは延びていない。そこに高札場が立地する。

〔八戸〕 寛永4（1627）年に南部氏が築城、下って寛文5（1665）年にその分藩としての八戸藩が成立という若い成立なので、町屋郭外型でヨコ町型を採る。大手門からのびる大手道が、通り町である八日町・三日町を越えてのちの長横町は、すでにその名のごとく横丁化している。高札場はこの八日町と三日町の境に立つ。

〔新庄〕 寛永2（1625）年、戸沢氏が建設。町屋郭外型にしてヨコ町型を採る。実質上の大手門前を、通り町である北本丁・南本丁が走る。大手道は通り町を越えてさらに延びているが、その行き詰まる場所は米倉である<sup>23)</sup>。高札場は南・北本丁の町境に設置された。

〔二本松〕 寛永20（1643）年入部の丹羽氏による改造後も山城を残し、侍屋敷地区と町屋地区が丘陵で隔てられている点では戦国期型だが、この丘陵が「郭内」と「郭外」を画定している町屋郭外型ともいえる。しかも郭外の町屋地区は付け替えられた奥州街道に沿うヨコ町型で、大手口の久保丁門前を横断している。高札場はこの本町の大手前に設けられた。

〔小田原〕 寛永9（1632）年入部の稲葉氏により改造が続けられ、同20年には大手口も箱根口（欄干口）へ、ついで宮前口に近い後代の大手門へと移動を重ねる<sup>24)</sup>。箱根口が大手門であった当時は、その真ん前を通る東海道に沿ってヨコ町型であったが、城の東に大手門を開くようになって、東海道より分かれて甲州に通ずる青物町・一丁田町などはヨコ町型であり、実質上の大手に当たる宮前口も、東海道の通り町に面していた。高札場はこの宮前町におかれたのである。

ところで、このクライマックス型は、城下町プランの変容からみると、最も完成度の高い町屋郭外型である点でも共通している。ここでこれまで述べたところを整理してみると、タテ町口型、ヨコ町口型は近畿ないし西南日本にその例が多く、また比較的形成の古い城下にみられた。次の十字ノ辻型、T字ノ辻型、L字ノ辻型などの間には時代的な新旧はないが、町屋郭外型にして、通り町に大手門を直に開き、しかも大手道消滅後、その門前に高札場をおくクライマックス型は、札ノ辻のあり方としても最終の相といえるだろう。会津若松などの大城下は別として、新庄・八戸・二本松など東北地方に、時期は遅れるが、突然、最も完成度の高いプランがもち込まれているのが注目される。

#### IV. 札ノ辻の賑わい

##### (1) 繁昌中心

十字ノ辻型～クライマックス型のいかんを問わず、多くの札ノ辻には問屋・会所や大店が集中し、城下最大の賑わいの場であった。ここで若干の代表例をみておきたい。

まず十字ノ辻型では仙台の芭蕉ヶ辻が有名だ。辻の四隅に重層・本瓦葺・入母屋造・大棟の上に蟠竜を戴く白壁の城郭式楼櫓を配置したが<sup>25)</sup>、これは大手の防衛とともに、城下の繁昌の演出でもあったであろう。また、ここは町割りおよび江戸道中・奥道中の基点とされ、本陣に当たる「外人屋」、脇本陣なども近辺に設けられていた。

名古屋の札ノ辻の賑わいは『尾張名所図会<sup>26)</sup>』にも描かれている。「駅馬会所、本町通・伝馬町の角にありて、官道の馬継所なり。(略)東西南北の岐なれば、京大坂より吾妻に下る官人も、伊勢路より信濃のかたへ通る旅客も、(略)みなこの所を往来せずといふ事なく、また町の中央なれば、御制札をもここに立てられ、半町ばかり東の方には観火台を置。」

川越でも、本町・高沢町、南町・喜多町のクロスする札ノ辻の一带、中でも南町は三芳野名勝図会も謳っているように市中第一の繁華街で

あり、『川越松山之記』にも「此所尤人家よく呉服店も五六軒有てにぎやかなり」とある<sup>27)</sup>。

つぎにT字ノ辻型では会津若松をあげておこう。札ノ辻の南角と北東角には築田氏と倉田氏という両大町検断の広大な屋敷が割り出されていた。またこの辻は「領内の中心点とされ、各地への距離はみなこの辻を起点として測られた<sup>28)</sup>」。札場の南には火の見櫓があり、ともに絵図面にも記載されている。厩橋では連雀町と本町の交点が札ノ辻だが、市商人の頭である木嶋助右衛門もここ(連雀町)に居住し、市神午頭天王は木嶋家の屋敷に祭られている。

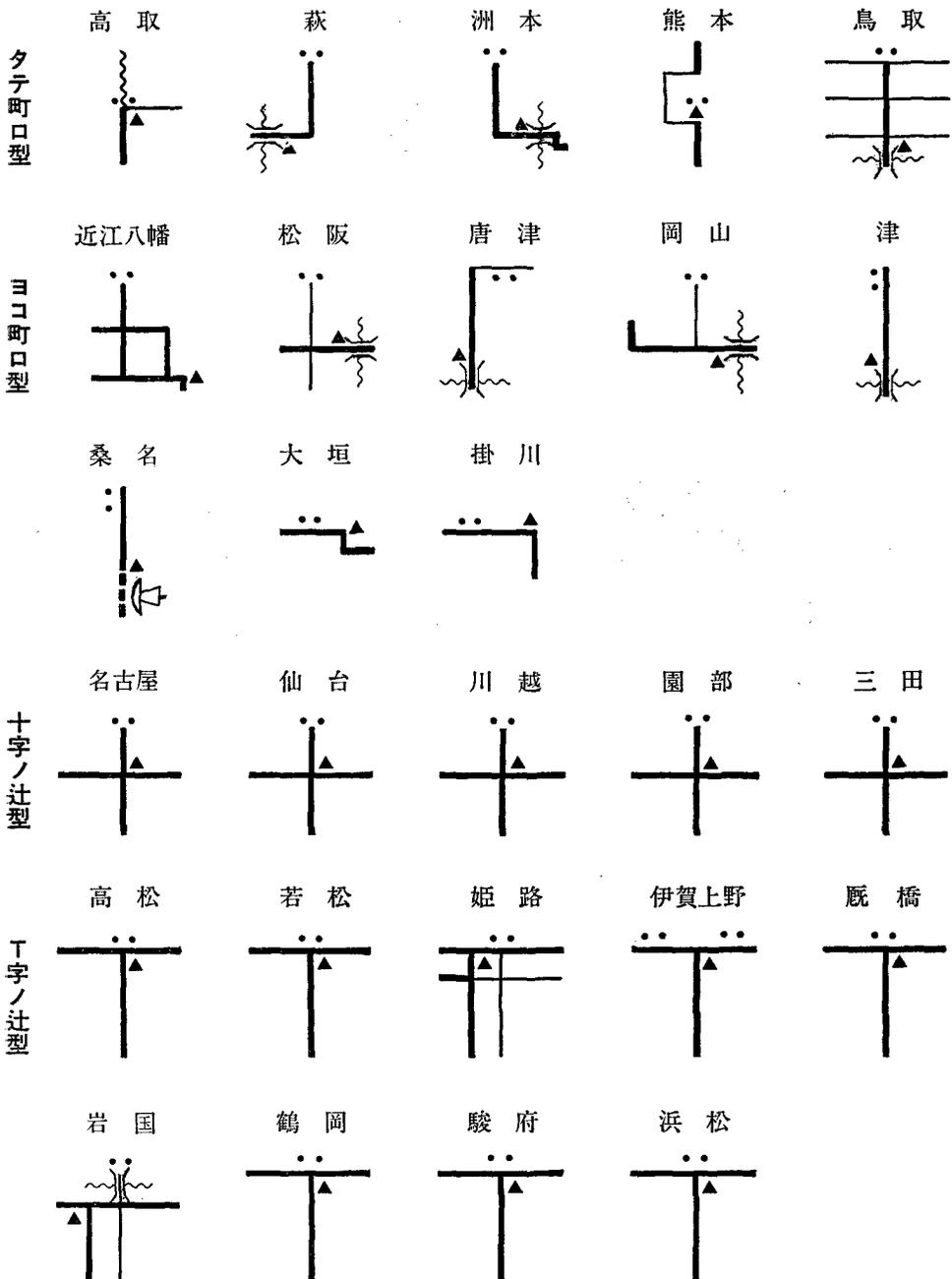
『前橋風土記』にも「民居・群工此に居る」と記されている。同じく本町についても「富商聚り居る、毎月四九の日を以て市と為す。(略)伝馬邸館及び資賓館の在る所なり」とあり、町年寄のほか有力な市商人が居住し、また本陣・問屋など宿駅の機能も本町に集中していた<sup>29)</sup>。

最後にクライマックス型についても二、三を例示する。新庄では大手前、北本丁・南本丁の町境に高札場が置かれたが、両町には問屋兼本陣の中嶋家、伊東家が、平均間口の5～6倍の広大な屋敷を構えているのをはじめ、伝馬関係の町役人や大店の集まる「城下の最大の繁華街<sup>30)</sup>」であった。

八戸では大手筋に面する三日町と八日町との間の辻が札ノ辻と呼ばれ、「城下第一等の目貫通り」であった。当町の北側中央東寄りには、「八戸三店」の一つ近江屋が店を構えていた。八日町には、各街道への伝馬継所がおかれていた<sup>31)</sup>。また二本松では大手門前が高札場だが、大手門に面する本町には豪家・富商・特権商人・旅宿が軒を並べ、上下本陣・問屋・伝馬が集中していた<sup>32)</sup>。

##### (2) シビックセンター型

以上は大手門前が城下最大の賑わいの地であり、従ってまた高札場の立地をみた例だが、つぎにヨコ町型でありながら、大手門前ではなく、またヨコ町口型のごとく城下の入口、内町外町の境界部でもなく、他のシビックセンターに牽



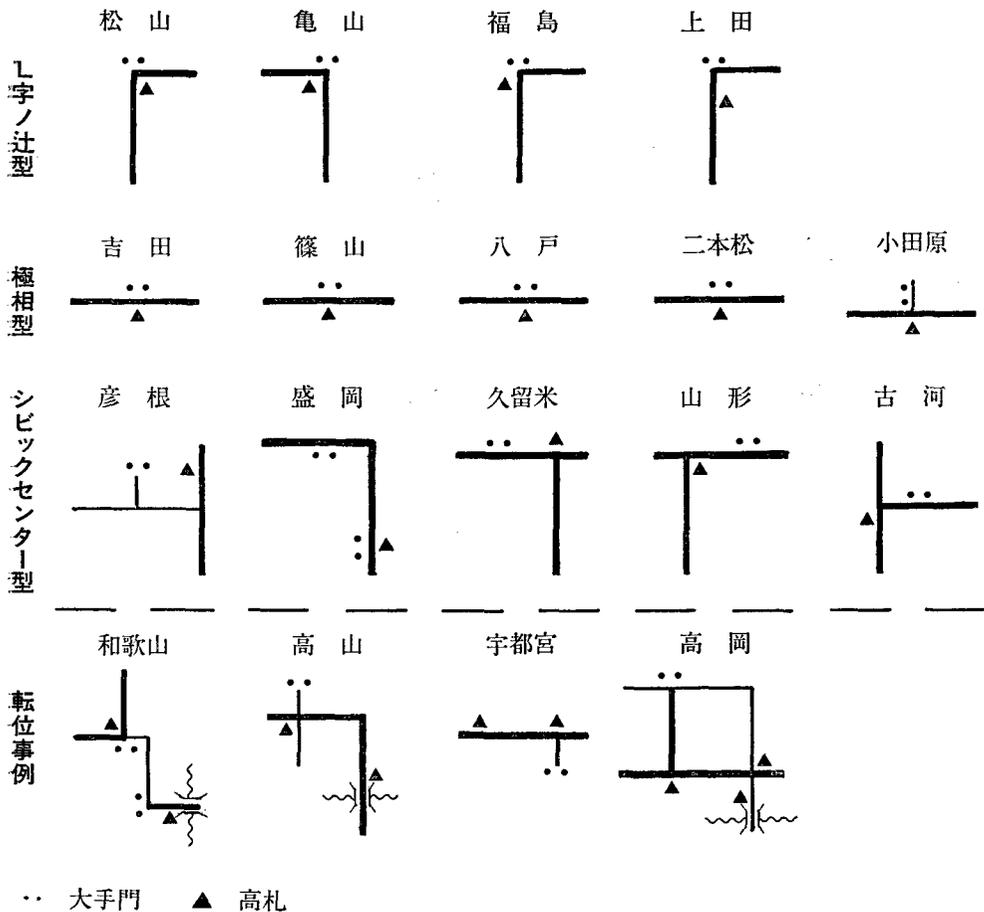


図1 札ノ辻のロケーションの諸類型

引されているケースを見てみたい。

〔彦根〕慶長8（1601）年、井伊氏が佐和山城下より移して典型的な内町外町型を建設する。その内町に中山道を導き入れた、その名も通り町一伝馬町、またこれとクロスして大手前を走る本町も、城地に対しヨコ町型である。これまたその名のとおり、本町も主要な町であったが、高札場は問屋場などのある伝馬町の白壁町との交点、北側に設けられた<sup>34)</sup>。

〔中津〕慶長5（1598）年、細川氏が黒田氏の城下町に大改修を加え、「おかこい」の中にプランの主要部を取める総郭型にするが、後には内町外町に発展した。蛸瀬口より迎え入れた街道は豊後町筋を西へ直進し、姫路町で左折、

京町魚の辻、あるいは諸町で右折し、小倉口、広津口に達していたと思われる<sup>35)</sup>。この左折後も右折後も、町通りは大手門および城地に対してヨコ町型に配列している。

ところで、当城下の高札場は京町に開く大手門の前ではなく、ややくい違って延びる大手筋と、京町より2筋下った魚町・内町がクロスする地点である。通り町が上記のごときルートであったとすれば、大手筋と古博多町との角に立地した銀札所やそれに隣る会所も、そして高札場も通らないことになるので、ある時期から、出田和久の推定<sup>36)</sup>のごとく、豊後町から塩町に左折し、舟町まできて大手筋へ右折し、京町で左折して大手門を通り、以下、小倉口（ないし

広津口)へ至るコースがとられたのではあるまいか。その段階では、大手筋は銀札場・会所をふくめ部分的にタテ町型に修景されたであろう。いずれにしても、シビックセンター型の札ノ辻だったと考えられる。

〔盛岡〕南部氏が16世紀末に始めた城と町の建設は寛永10(1633)年まで続けられる。内町外町型で、惣門から穀丁一六日町一呉服町一紺屋丁一鍛冶丁一紙丁一本丁一八日丁などを経て榊形にいたる奥州道中の通り丁を軸に、ヨコ町型の町並みが形成された。このうち紙丁より上ノ橋をわたった本丁が大手門前であり、また鍛冶丁にも領内の道程元標の一里所や駅所が、六日町には御仮屋(本陣)などがあって、いずれも賑わいの場所ながら、札ノ辻は上ノ橋と下ノ橋の中間、中ノ橋の通りと紺屋町との交点とされた<sup>36)</sup>。紺屋町は城下随一の本店もみられる繁華な町通りである。上ノ橋や、まして大手前の本丁を選ばなかったのは、城下プランの北に偏すると考えられたのであろう。

〔久留米〕元和7(1621)年、有馬氏が旧城を改造し、町屋郭外型の城下町をつくる。城郭の南に、肥前と豊後を結ぶ通り町を軸にヨコ町型の町屋が発達する。高札場は大手門橋前ではなく、大手前を横切る両替町が東へのび、狩塚橋で曲折し長町一丁目～十丁目と進む途中、北上する上妻街道が原古賀町(一丁目～七丁目)を経て三本松町で、長町の通り町と交叉する点に位置する<sup>37)</sup>。おそらく大手前は西が侍屋敷地区で、人口流動という点では札ノ辻一丁目・三本松町の方が勝っていたためであろう。狩塚橋前の「使者屋」「在方会所」なども札ノ辻にほど近い。

〔山形〕文禄年間に最上氏によってつくられて以来、何度も改造され、領主も交代するが、広大な三ノ丸に侍屋敷地区を入れる町屋郭外型である点には変わらない。羽州街道につづく通り町が六日町・七日町・横町・十日町などと城地の東に横づけになったヨコ町型を採る。大手門たる七日町口では大手道は消滅している。そのためか高札場は十日町口に設けられ、ここに

は市神の自然石も祀られていた。十日町を南下すれば、八日町(もと伝馬町)・三日町(一名伝馬町)など仙台街道の通り町とクロスする<sup>38)</sup>。十日町は元来、七日町とならぶ紅花市の中心地で富商が軒を連ねたが、大手口ではなく十日町口が札ノ辻とされたのは、上記の伝馬町の交通量に牽かれてのことであろう。

以上、あげた事例は乏しいが、シビックセンター型は彦根や中津など西南日本の内町外町型城下には早く出現し、久留米クラスの城下(その他、丸亀、大分なども)や、盛岡・山形など東北地方ではやや遅れて見られたように思われる。

## V. 札ノ辻のトボス

### (1) 転位事例の検証

タテ町口型が早いとか、クライマックス型が遅いとか記してきたが、それは天正・慶長初期などを早いとみ、元和・寛永などを遅いという程度の捉え方であった。同一城下で札ノ辻が移転したケースについて、各類型の前後関係や、転位のあとさきの場所の意味などを考えてみることにしよう。

〔和歌山〕豊田秀長の城代桑山氏当時の城下は城地の東部にある。和歌川の東大橋から入る「広瀬通丁」がその名のように通り町で、その西端から北に折れ堀詰へと続くL字形の街道導入で、広瀬通丁を直進した地点にある岡口門が大手門であった。元和年間<sup>39)</sup>に大手門は、城の北東隅の一ノ橋門(北ノ橋門)に変更となる。徳川氏時代に入ると、その先の外濠に架かる京橋が実質の大手門となり、これに対しタテ町型の本町通り、これとクロスする駿河町～寄合町などのヨコ町型町並みが形成される。

岡口門が大手門であった時期には、高札場は、大橋の西詰にあり、徳川氏時代には実質上の大手門たる京橋北詰が「札ノ辻」となる。つまり、タテ町口型→T字ノ辻型と移行したことが検証される。

〔高山〕上記とは時代も下り、別の意味をもった移動の事例である。

「前に申通り、一之町二町目西側、先年より高札場有之候所に、享保十四乙酉年八月に至、東川原町の内、中橋詰へ引る、時の御代官長谷川庄五郎殿支配の節なり。」(『飛驒国中案内<sup>40)</sup>』)

高山城下は慶長10(1603)年に築城を完成させた森長近、およびその子の可重時代にはぼ出来あがる。「大手道」は城の南端、南之丸からの迂回する山道で、榊形橋近くの大手口にいたる。この大手口に対し、一番町(一之町)～三番町(三之町)はタテ町型に形成された。これとは別に、城地の北部の三ノ丸から北東に下る城坂道は「常の大手」とよばれた<sup>41)</sup>が、そこからエビ坂道を下りると一番町と出合う。当初の高札場は、この一番町と肴横丁の交点西側の南側に設けられていた。「常の大手」を実質上の大手口と考えると、一番町はその前面を横断していたことになるから、十字ノ辻型の一種ともいえよう。

享保14(1729)年の移転先である中橋西詰南側という位置は、高山城の大手口に近い橋詰というよりは、元禄5(1692)年に天領となつてのち、金森氏の下屋敷が代官の陣屋とされたので、その正面に据えられたとみるべきであろう。しかしそれは各種の大手門志向というより、「この橋詰は江戸・越中・益田・郡上等諸街道の総起点で、中橋は、いわば飛驒の日本橋であった。したがって人馬問屋などもあり、交通のもっとも頻繁な場所<sup>42)</sup>」であり、シビックセンター型と解すべきだろう。

〔宇都宮〕長い前史は措くとして、元和5(1619)年、本多氏の大改造後は町屋郭外型を採り、上町に付け替えられた奥州街道を通り町としてヨコ町型を呈する。当初の高札場は宇都宮明神馬場先で、これは付け替え後の大手門よりやや東にそれるので、橋や内町外町には関連ないが、ヨコ町口型といえようか。元禄年中に、元和の改造で「池上町分リテ」立てた伝馬町に移転した(小伝馬町との辻)。旧「東石町問屋場、伝馬町=引<sup>43)</sup>」とあるように、ここは日光街道との追分けのある交通の要地で、問屋の近辺に

は大店、旅籠屋、遊廓などが集まる「宇都宮で最も賑やかな場所となつていた<sup>44)</sup>」。各藩の使者を接遇する「対面所」、火の見櫓、半鐘(享保7年設置)などもおかれた。従つて、シビックセンター型に移行した事例といえるだろう。

〔高岡〕慶長14(1609)年、前田利家が「京師ノ町形=倣ヒ作ラルトナリ」(『三州志』)と云われるごとく、整然と町割りし、「而して侍屋敷は町家と雑居せず<sup>45)</sup>」という町屋郭外型であった。次は高札場を二転三転させた興味ある事例を伝える史料なので、いささか長文だが引用しておきたい。

「当所御制札、往古利屋町大法寺前に有之処、天明六年只今之場所江移替、其後遊行上人通行之節、重而前段大法寺前へ移替御座候得共、同年閏十月又々只今之場所江移替に相成申候。然処博勞豊町には馬借持多く居住罷在、毎日馬牽出候。往来に而兎角御制札に馬を縲、通行難仕儀儘有之、且雪中之砌、ずり雪に而怪我仕候者も御座候而、迷惑之趣毎度町頭より願聞申候。其余毎歳御祭礼之節、曳山に指問、御制札取片付候儀も外箇所にては無之事に御座候。依而私共一統詮義仕候処、今度幸諏訪社請添地いたし、余程社内も手広に相成申候に付、別紙絵図之通橋詰へ移替候得は、駅之見形も可宜と奉存候間、右場所へ移替之義御聞届被成下候様仕度、此段奉伺候、以上。

文久元年五月

町年寄 三木屋 市右衛門

町算用聞 越前屋 甚藏

町肝煎 中条屋 六郎右衛門

高岡町御会所」

(『寺崎氏旧記<sup>46)</sup>』)

ここで「往古」とは『寛永覚書』に「一、御制札掛ヶ所 御馬出=有」とあるから、少なくとも寛永以来ということになる。実質上の大手門からのびる御馬出町が利屋町・通町と突き当たるところが大法寺である。十字ノ辻型の一種といえるだろうか。

天明6(1786)年に「只今之場所」つまり「博勞豊町」に移り、その後この両位置間を行

き戻りする。「博勞疊町」は通町に隣る人通りの多い町といえるから、シビックセンター型に属しよう。

文久元(1861)年、今度は千保川の橋詰近くの諏訪社の敷地内への移替を願い出ている。この位置は前記の通町と博勞疊町と町境を北に折れて旅籠町・橋番町、橋を渡って中島町と続く街道の要地であるが、旅籠町までは本町、橋番町は地子町、中島町は宝暦年中にできた散り町であり<sup>47)</sup>、タテ町口型の橋詰立地のタイプに分類できよう。しかし、これはタテ町口型ないし十字ノ辻型からシビックセンター型、またタテ町口型への逆行ということではあるまい。移替を願い出ている理由にこそ注目すべきであろう。

かつて高札は〈上意〉のシンボルであった。たとえば前記の鶴岡の三日町橋の場合、寛文元(1661)年に整備されたようであるが、「高札場は権威の象徴であったので屋根をかけ柵を囲らした立派なものとし、その前を通る者は脱帽敬礼するをよしとした<sup>48)</sup>」のであった。同様に桑名でも、「高札場は一般に畏敬すべき場所と見なされ、その所在地域は除地(年貢免除)として一区画をたもち、通過の際、常に脱帽敬礼する人は心掛けのよい人とせられていた<sup>49)</sup>」。また大垣では「寛永19年4月はじめて高札が大垣町へ下付され、火事の際は取りはずすことになっていた<sup>50)</sup>」という。同様に浜松でも「御役六町」(伝馬役の6カ町)が「高札場普請役」を兼ね、出火のときは大工町から人夫が出て御役町の庄屋が立合いで取りはずすことが定められていた<sup>51)</sup>。

これに対し幕末の高岡では、「馬借」たちが「御制札に馬を繋ぐので通行難儀となり、制札の屋根から雪がずり落ちて怪我人が出たり、祭礼の「曳山に指問」えるなどと「迷惑」視されているのである。本稿で想定してきた高札場の諸類型を超えた次元の現象、あるいはこれも一方の極相と捉えるべきであろうか。

## (2) 祭礼の御旅所

時代により地域により、札ノ辻の意味もさま

ざまな変化がみられたが、ここで城下あげでの祭礼の日、神輿巡行との関わりをつたえる事例に出会ったので、一括して取り上げてみたい。

〔古河〕小笠原氏について慶長6(1601)年入部の松平氏によって近世的城郭が構築される。渡良瀬川と広大な水濠のうちには侍屋敷のみしか入れない町屋郭外型である。観音寺郭の大手前一带は侍屋敷地区で、タテ町型・ヨコ町型を判じ難いが、城東の町屋主要部、日光街道や江戸道につながる一丁目・二丁目などの「通り町」は、城地に対してはヨコ町であり、またこれと侍屋敷地区を経て大手門を結ぶ江戸町・石町のメインストリートもヨコ町型である。

ところで当町の産土神である雀神社は、松平氏の城郭拡張の際、城内にとり込まれた茂平河岸に残されたので、城外の城下の北端に移された<sup>52)</sup>。しかしその社も木戸に隔てられた侍屋敷地区・足軽組屋敷地区の奥であったから<sup>53)</sup>、6月18日の祭礼の折には、高札場に御仮屋を建てて迎えたのである。そこは上記の通り町である二丁目と本陣・脇本陣・飛脚問屋の他、江戸町・石町とともに大店も多かった。

「武士と町人は木戸や城門を境に、居住に限らず生活空間(行動範囲)も限定されていた。

(略) 逆にこうした空間秩序がなくなり、

(略) 町人と武士との間に交流がもたれるのが、節供や祭りのときであった。(略) 一方、武士が町人町へ出向くのは町方の祭礼のときである。雀神社の祭りは、普段町人が行けない屋敷町の隅に鎮座する氏神様を、年に一度町人町のお仮屋に迎えお慰めする祭りである。

(略) このときには平常軽々しく町中を歩くことのできなかつた本丸に住む御屋敷女中衆も、参詣と称して珍しい市中見物ができた<sup>54)</sup>。」

前出の会津若松でも、札ノ辻がよく似た役割りを演じていた。文禄年間の大改造の折、多くの寺社が町屋とともに郭外に移されたが、諏訪神社は郭内にとり込まれた。この社は古く芦名氏によって信州から勧請されたものだが、城下町全体の総鎮守であった。種々経緯はあるが、

宝暦11(1761)年に復活された8月の授光祭には、神輿渡御が郭内の本一丁町から大手の甲賀町を経て郭外の町屋地区を巡り、諏訪神社に戻るが、ここでも途上、大町の札ノ辻の御旅所にとどまる。

諏訪神社は郭内にとり込まれることによって日常的には町々と隔離されているわけであるが、神輿渡御を介して郭内と郭外という城下町の二元性が解消されるのである。「トポスは単なる場所ではない。それは人間の生と結びついた記憶や意味が濃密に表現される場所であり、このようなトポスの集積の中にかつての我々の生活はあった<sup>55)</sup>。」

〔八戸〕法霊社は元来、八戸村の産土神であったものを、南部藩によって八戸城の館神とされて本丸に、ついで寛文6(1666)年の頃には二ノ丸におかれた城下町全体の鎮守であった。享保6(1721)年から、町民の願い出によって祭礼(7月19~21日)の折の神輿渡御が行なわれることにより、二ノ丸の社殿から表門を出て、札ノ辻から西へ、表門・裏門をめぐる、「八日町の札の辻から再び社殿へもどった<sup>56)</sup>。」この場合は、御旅所は札ノ辻でなく、長者山で一夜とどまっている。

〔福島〕土産神の稲荷神社は城内にとり込まれたわけではないが、宝永元(1704)年、板倉氏初代藩主が修築を行なって以来、歴代藩主も厚く尊崇した。9月の祭礼の日には、神輿や総七ヶ町の山車などが城内に入り、藩主・家中の拝見の場所に列座、ついで、上町通りから表町通りや、三ノ丸内の家中通りの神輿渡御が行われた。この際の御旅所は札ノ辻である上町のおせ屋の前に設けられた<sup>57)</sup>。

同様の事例は西南日本でも見出せるものであろうが、たまたま今般、管見に入ったのがすべて北関東から東北地方の城下というのは、単なる偶然であろうか。軍事的必要があれば、土地の産土神をも城内にとり込んでしまうというのは、権力側の強権発動ともいえる。だが、例えば近畿地方などでみられた、由緒ある寺社の礎石も墓石も容赦なく城の石垣にしてしまうなど

の行為と比べると、藩主も士・町もともどもに在来の産土神を尊崇し、城下町全体の祭礼として城の内外にわたって神輿渡御を行なうというあり方は、権力的とは云えないように思われる。札ノ辻が〈上意〉と民衆の接点であることを思えば、この地点に御旅所がおかれ、巡行のポイントとされることは、むしろ当然であろう。さらに多くの事例を得て、もし、これを東北日本型といえることになれば面白い。

## VI. おわりに

冒頭に設定した課題については、適宜、問題を整理しつつ述べてきたので、ここで要約を繰り返すことは省略し、今後に残されたテーマを二、三述べるにとどめたい。プランに関しては、札ノ辻は仙台・萩・前橋その他、多くの城下町において町割りの基準にされていた。またトポスに関していえば、辻は賑わいの場所であると同時に、辻斬り、辻姫、辻占、異界の入口などマイナスの記号も負っており<sup>58)</sup>、仙台・高山その他、高札場は処刑者のさらし場でもあった。町割りの基準、辻の両義性ともに、さらに多くの事例をあつめて精査すれば、地域類型との関わりにおいても、興味深い問題が内包されているような気がする。(関西大学文学部)

### 〔注〕

- 1) 矢守一彦(1970):近世日本の〈地域〉について(『幕藩社会の地域構造』大明堂)38~66頁。
- 2) 矢守一彦(1988):城下町プランの地域別考察(『城下町のかたち』筑摩書房)107~202頁。
- 3) 秋永政孝(1978):高取(原田伴彦・西川幸治・矢守一彦編『近畿の市街古図』鹿島出版会)
- 4) 三坂幸治・近藤隆彦(1979):萩(原田伴彦・西川幸治・矢守一彦編『中国四国の市街古図』鹿島出版会)
- 5) 位野木寿一(1963):洲本市の都市構造の推移、大阪学芸大学地理学報, 10, 54~57頁。
- 6) 前掲2), 66頁。
- 7) 江州蒲生郡八幡町惣絵図, 前掲3)所収。
- 8) 藤本利治(1989):『歴史時代の集落と交通路』地人書房, 199~216頁。

- 9) 福岡 博(1972):唐津(原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図一西日本編』鹿島出版会)146~147頁。
- 10) 『岡山市史』巻3, 2313頁。なお同書引「寛文七年八月巡見留」に「延宝九年酉七月に大学殿へ窺,京橋西詰御高札場北に有之候を南方へ立替,橋本町丁代家を北に町内より立申候」とみえる。
- 11) 矢守一彦(1972):『城下町』学生社,153~157頁。
- 12) 藤本利治(1976):『近世都市の地域構造』古今書院,268~288頁。
- 13) 『新修大垣市史』通史篇1(1968),461頁。
- 14) 関 七郎(1983):掛川城下町絵図(原田伴彦・矢守一彦編『日本城下町絵図集一東海・北陸篇』昭和礼文社)5頁。
- 15) 『熊本市史』(1973),374頁。
- 16) 以上の諸城下については前掲2)参照。
- 17) 『姫路市史』(1919),175頁。
- 18) 『岩国市史』上巻(1970),633頁。
- 19) 『鶴岡市史』上巻(1962),498頁。
- 20) 若尾俊平(1979):駿府の都市構造と社会(『静岡市史・近世』)520~530頁。
- 21) 以上の諸城下プランについては前掲2)参照。
- 22) 尾崎行也・佐々木清司編(1983):『上田歴史地図』郷土出版社,88~89,101~102頁。
- 23) 『羽州新庄城および同城下町の研究』(1988,新庄市教育委員会)所収絵図による。
- 24) 岩崎宗純・内田 清・内田哲夫(1980):『江戸時代の小田原』小田原市立図書館,39~40頁。
- 25) 『仙台市史』巻1(1954),373頁。
- 26) 『尾張名所図会』巻之一,なお,「札ノ辻問屋場」の項に,「慶長十八年より初まる。(略)正徳元年十月初めて札ノ辻出来ず。それ以前は問屋の軒に御制札かかりし由」とある。
- 27) 岡村一郎(1955):『川越の城下町』川越叢書刊行会,109頁。
- 28) 『会津若松史』巻2(1965),312~313頁。
- 29) 『前橋市史』巻3(1975),33頁。
- 30) 前掲23),89,118頁。
- 31) 高島成信・三浦忠司(1983):『南部八戸の城下町』伊吉書院,118~120頁。
- 32) 田中正能(1973):二本松(原田伴彦・西川幸治編『日本の市街古図一東日本編』鹿島出版会)118頁。
- 33) 矢守一彦(1984):姫路城下の形成と構造(『日本名城集成一姫路城』小学館)180~194頁。
- 34) 西川幸治(1972):『日本都市史研究』日本放送出版協会,239頁所載「寛政年間彦根伝馬町絵図」。
- 35) 『日向道』大分県教育委員会(1980),110頁。出田和久(1989):城下町中津の都市構造とその変容(『山国川一自然・社会・教育』大分大学教育学部)173~180頁。なお,通り町のコースは書信での御教示による。
- 36) 吉田義昭・及川和哉編(1983):『図説盛岡四百年』郷土文化研究会,152~177,168~171頁。
- 37) 『久留米市史』巻2(1982),453頁。
- 38) 『山形市史』中巻(1971),571~575頁。
- 39) 三尾 功(1985):『城下町和歌山百話』和歌山市,102頁。
- 40) 『高山市史』上巻(1981),461頁。
- 41) 大野政雄(1977):高山(矢守一彦編『金沢・名古屋一日本の古地図』講談社)
- 42) 前掲41),31頁。
- 43) 『宇都宮市史』巻6(1984),123頁。
- 44) 徳田浩淳(1970):『宇都宮の歴史』下野史料保存会,141,182頁。
- 45) 『高岡史料』上巻(1972),357頁。
- 46) 前掲45),141頁。
- 47) 『高岡市史』上巻(1959),774~775頁。
- 48) 『鶴岡市史』上巻(1962),582頁。
- 49) 『桑名市史』本篇(1959),324頁。
- 50) 前掲13),462頁
- 51) 『浜松市史』巻2(1971),224頁。
- 52) 『古河市史』通史篇(1987),295頁。
- 53) 『古河市史』民俗篇(1983),164頁。
- 54) 前掲53),165頁。
- 55) 野沢謙治(1986):城下町会津若松のトポス(-),日本民俗学165,1~15頁。
- 56) 前掲31),328頁。
- 57) 『福島市史』巻1(1972),353~354頁。
- 58) 「金沢城下のコスモロジー」(矢守一彦『金沢城下絵図集成』能登印刷,近刊)参照。
- 〔付記〕  
本稿は文部省科学研究費補助金(平成3~4年度)一般研究B「地域と技術の関連についての地理学的研究」(代表者矢守一彦)による研究成果の一部である。

## ON THE LOCATION OF THE *KŌSATSU* IN THE CASTLE TOWN

Kazuhiko YAMORI

A *kōsatsu* is a notice board on which the ordinances of the Tokugawa Shogunate or of a *daimyo* were written. In the early Edo Period the *kōsatsu* were usually set up, for instance, at the head of a bridge, in the entrance of the castle towns. In the next stage, however, the *kōsatsu* were set up in the corner where the street leading to the *ōtemon* (the front gate of the castle) and a high road traversing the castle town crossed; or, where two streets crossed making the form of the letters T or L in front of the *ōtemon*. The newest type in the plan of the castle town is seen in those which had a high road running along just up in front of their *ōtemon*. In this type of castle towns, the *kōsatsu* were set up in front of the *ōtemon*; which was the latest location for the *kōsatsu*.

The illustrations show the different locations of the *kōsatsu*. the signs •• stands for the *ōtemon*, ▲ a *kōsatsu*, and the bold lines show streets and high roads. The corners where the *kōsatsu* were set up were the busiest part of the castle towns. With big shops of the merchants thronged around there, the corners of the *kōsatsu* were where warriors and townspeople contacted.

In *Aizuwakamatsu*, when, in the festival seasons, the *mikoshi* (moving shrine) of the rituals went round in the castle and in the residential areas of the townspeople, a temporary shrine was used to be set up for the *mikoshi* to rest in the corner where the *kōsatsu* stood.

In the old days, the *kōsatsu* were respected by the townspeople as the symbol of the power of the governing side. But, with time, people came to pay less respect to the *kōsatsu*, there were even such townspeople as tied their horses to the *kōsatsu*. Others regarded the *kōsatsu* as a nuisance because it blocked the traffic. Thus we can see interesting changes in the *topos* of the corner of the *kōsatsu*.